

# ぷらす

出居清太郎ワールドへのご招待

No.107  
2018・秋

温かい心で受け入れる

(1) まだかい、じゃ一緒にやろう

簡単な日常の会話ですが、「勉強しましたか」「しません」という親子の問答ですね。「しません」と子供が答えると、「なぜしないんだ。ダメじゃないか、いつも言っているのに。早く勉強しなさい」と押しつける親がありますね。「まだかい、じゃひとつ一緒に勉強するか」と勉強を見てあげるなり、自分も勉強するなりして、というのが愛なんです。

ある母親が「息子が賭けマージャンをして困っています。どうかおたすけください」と泣きついてきたことがある。折を見てその家をたずね、「私にマージャンを教えてください」とその息子に申し込んだ。母親はあきれていた。止めにきたはずの私が当人とマージャンをやるついでにこのだから、あきれるのは当然である。「そんなことをお願いしたわけではありません」と私を責めたが、とつとつ私はその息子とマージャンの卓を囲み、初めて牌というものを手にした。

帰る時、その息子の靴を出してもらい、磨いてあげた。マージャンに狂っていたその息子は、私の姿を見て涙を流していた。私は靴にブラシをかけながら、その息子に、賭けマージャンをやめなさい。「賭ける」といっつのは、「欠ける」ことになって、護国の神となられたお父さんの徳を欠いていくからね。賭けるかわりに景品を出すようにするのだね。

と言った。これが私のマージャンの習い始めであった。

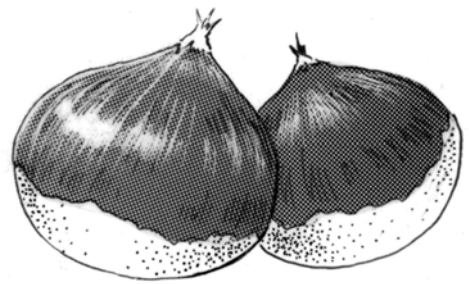
( 出居清太郎先生の言葉から )

親は子に対して、年長者は年少者に対して、「〜しなさい」「〜してはいけない」といっつことをよく言います。

親は子を、年長者は年少者を、注意し、

指導する役割があるといつても、注意すればすぐ相手が従ってくれるとは限りません。それで、なぜ言っつことをきかないんだと不満に思ったり、反発されて、どうすればいいだろうと悩んだりすることになります。

そこで、大事なことは、相手が子供であれ、目下であれ、弱者であれ、責めたり、



カット 齋藤啓子

見下したりするのではなく、一人の人間として尊重する、という姿勢を持つ、ということではないでしょうか。

その姿勢に立てば、場面場面でかける言葉も、とる行動もおおのずから違ってくるのではないのでしょうか。

## (2) 人の行動を止めない

生きたい これは人の本能である。  
行きたい―これもまた、人の願いである。

「飲みに行きたい…」この願望を止めると行き詰まりが来る。止めるよりも、自分も一緒にそこへ行って調べてみることを協力という。この協力は愛情である。愛情は温かい心である。愛情を失って事に

「やめなさい」「行ってはなりません」と人の行動を止めてばかりいると息が止まって冷たくなる。

広く温かい心は大地の心である。平等無差別で、あらゆるものを受け入れ、浄化する。  
(出居清太郎先生の言葉から)

人が生きていくということは、動いているということでしょう。年をとって寝たきりになっても、吐く息吸う息の交換があり、血液の流れがあり、細胞の変化があります。それらの動きが止まった時が死んだ時です。ですから、人の動きを止めてはいけません。というのが第一原則と考えるべきでしょう。

子どもは少しもジツとしていません。無邪気に動いています。それが彼らの生きる

ことであり、彼らの成長でしよう。

しかし大人の場合は、こうしたいという気持ち突き動かすもとに邪念がある場合があります。その邪念は生まれてこのかたの環境の中で生じたもので、その邪念からの脱却は、本人がするしかありません。ただまわりの人間が、邪念から出た、その人の「くしたい」という思いを、ただ否定するのではなく、人の動きを止めないとという第一原則を念頭に、認め、受け入れるという広い、温かい心で接することが、その人の邪念からの脱却を手助けすることにつながるのではないでしようか。

## 編集後記

この7月に高知市に県立図書館と市民図書館が合体した図書館がオープンし、そこに寺田寅彦の銅像が建てられました。その台座には彼の有名な「天災は忘れたころにやってくる」とも一つ、彼の口ぐせだったという、「ねえ君不思議だと思いませんか」という言葉が刻まれました。天災は、人々に忘れられたころにやってくる、まさに不思議なことですね。

次号は3月1日発行です。(H・Y)

平成 30 年 10 月 1 日発行 ふゆのあり 706 号付録 ぷらす α 平成 30 年秋号(通巻 107 号) 編集人 山本博也

発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町3-11-1 修養団捧誠会壮青少年委員会 TEL03-3397-11493